

『夜の寢覚』 欠巻部の一考察

村瀬美智子

これは、昭和四十一年度の卒業論文の一部を纏めたものであることを先にお断りしておきたい。

『夜の寢覚』は、精緻な心理描写をもつ、世界最古の数奇な女性の悲恋の一生を描いた物語である。そこで、その悲恋の追求のされ方、原因などを、女主人公（寢覚上）の心の動きという観点から探つてみたのであるが、その結果だけをここに簡単に纏めておくことにする。

寢覚上と主人公（中納言）との結びつきは、宿命的な契りによつて始るのであるが、その時にはまだ寢覚上の心に恋の芽生える余裕はなく、寢覚上の悲恋の一生は老閨白との結婚を機縁として開始される。即ち、寢覚上婚約の報に驚いて駆けつけた主人公の心を尽しての言葉、睦しい語り、寢覚上は徐々に打解けて行き、ここに初めて異性への愛が芽生えたのである。しかし、それは姉を裏切ることにはかならない。寢覚上は感情と理性との板挟みに苦しむのであるが、以後のストーリーの展開の骨子を簡

条書にしてみよう。

- ① 老閨白と結婚↓主人公への愛の拡大深化
- ② まさこ誕生↓老閨白に愛情を感じる
- ③ 大君死・老閨白死
- ④ 帝闖入事件↓主人公との仲の復活
- ⑤ 生霊事件↓出家希望
- ⑥ 懐妊の事実↓出家断念、主人公邸へ
- ⑦ 幸福
- ⑧ 偽死事件↓出家政行

愛を知り一人の女に成長した寢覚上は、①結婚によつて一応家族から離れた心細さ、夫への失望などが重り合つた結果、物に憑かれたように初恋の人に心を走らせ、その心の中では主人公が益々理想化されていったものと思われる。作者はここで寢覚上の主人公への愛を充分拡大させ、動かし難いものにする、引続いて②で老閨白を愛するようにならせて、二人の男性を同時に愛する苦しみを——というより寧ろ、自分を慈しんでくれ

る老閑白の心に背く苦しみといった方が適當かもしれない。寢覚上が老閑白に懐いた愛情は、父に対するのと同じものように思われる。——を経験させて行く。そして必然的に主人公との仲も遠ざかり、その寂しさに耐えかねた主人公が、女一宮を妻に迎えるという状況設定をしたため、折角③で寢覚上は自由の身になつても、予想される不幸から身を避けるために、主人公との事は思い離れて過ごさねばならなかつた。不満足ながらも穏やかな生活だつた。だが、作者はそれを許さず、④によつて、①で育てられた主人公への愛を寢覚上に再確認させ、二人の仲を復活せざるを得なくなつたところで⑤を起こし、寢覚上に出家の決意をさせるが、結局それは⑥によつて果されず主人公へ迎えられる事になつてしまふ。だが、女一宮という歴とした正妻の存在する結婚生活は危惧した通りのものであり、「こは、あるまじき世に、しばしめぐらふぞかし」(379頁。日本古典文学大系本による。以下同じ)と、表面は諦め切つた風を装つているが、その実内心は、主人公を独占したい欲望——独占したくても出来ないからこそ、故閑白の昔を恋しく思い出すのである。——と、諦めとが複雑に交錯していたものと考えられる。「幼き人」の御地かりばかりにそむきがたく、

けではない。主人公への思いは一応超越出来たようであるが、子供達の事は常に心にかゝり、陰ながらその動静に注目していたらしく、まさこの勘当には思い余つて、折角被りおゝせた秘密のウエトルをかなぐりすてしまふ。結局寢覚上の晩年は、子供達にとり囲まれ、主人公を「おほかたの頼もし人」として、かつての父入道太政大臣のような生活を送つたものと思われる。

冒頭で、「あさからぬ契ながら、世に心づくしなるためし」「いたくものを思ひ、心のみだし給べき宿世」と設定しただけあつて、寢覚上の一生は「天人降下」に始まり「偽死事件」に終るまで、よくもこれだけ種々の事件にぶつかつたものだと思える程のものである。それらのうち所謂第一部に見られる「天人降下」「ものごとし」「主人公との契」等の事件は、ストーリーを展開させる原動力とはなつてゐるが、物語の内部から当然起るべきとして起きた事件とはいえず空想的浪漫的色調が濃いのに對し、所謂第二部以降の諸事件(①—⑧)は全て物語世界内部にその發生の因が求められ、その背後には登場人物の心理のつながりが見られる。いいかえれば、個人(寢覚上)の心理の動きが次々と事件を発生させ、ストーリーを展開させているという事で、第二部以降の

さすらへ出てたるにこそあめれ」(379頁)というのは、ともすれば主人公に絶対的な愛を要求し勝ちな心に言いきかせる言葉である。理性で本心を抑えに抑える事によつて、少しでも苦しみ、悲しみから遠ざかろうとする。主人公に要求するものが少なければ、それだけ失望も少なくなるというわけである。このように、表面は穏やかながら内心徐々に悩む寢覚上の姿を描きつゝ、一方で女一宮を出家又は死亡などの理由で物語世界から遠ざけておいてから、⑦寢覚上に幸福の絶頂——子供達も次々に成人し、大姫君は中宮に、尚侍腹の若宮は東宮になり、寢覚上一族は榮華を極めると共に、寢覚上自身は実質的な一夫一婦を達成した。——を経験させる。しかし作者は、寢覚上にとつて生れて初めてといつてよい位、何の悩みもない幸福な生活を味わせた直後、再び寢覚上を不幸の底に突落せようと、④から派生したともいふべき⑧を出現させ、寢覚上の主人公への愛を一層強固なものにすると共に、⑦と⑧との余りの相違から寢覚上に変わらない物、より確かな物を求める心を起こさせ、出家へと導くのである。⑦は現世のはかなさを寢覚上に悟らせる縁となつて、寢覚上は出産を機に出家を敢行したのであるが、出家後完全に現世とのつながりを断ち切れたわ

織りなす物語世界の色調は甚だ現実的なものとなり、それと共に寢覚上のイメージも現実的具体的人間的なものとなつて把握されるようになってくるのである。第一部のように単なる絵にかかれた高貴な姫君の姿ではない。ところで⑧の「寢覚上偽死事件」の実態についての定説はまだないのであるが、現段階では、寢覚上が冷泉院の手から逃れるために取つた非常手段で、山の座主の験力によつて一時死んだような状態になつたものがその後蘇生させられた事件と解するのが適當なように思われる。そして、物怪を信じたり夢を信じたり陰陽道を信じたりする迷信深い時代に生きた平安朝人にとつて、僧侶は一種の「まじない師」的存在であつて、特別効験のある高僧なら一人の人間を一旦死んだような状態にさせ、再び蘇らせることが出来ると信じていたかもしれない。もしそうなら「偽死事件」も当時の人々にとつてはそれ程不自然なものではなく、現実でありそうな事と考えられていたといつてもよからう。それを無名草子作者が不自然非現実的と考えたのは、作者の性格が不自然非現実的な事をいちじるしく排した事によるものであらうと考えられる。結局、第二部以降のストーリーの展開は、現実

覚上が事もあろうに「さだすぎた」老関白と結婚したり、帝とか大皇宮といった人々が、高貴な人にあるまじき振舞をしてゐる点など、不自然といえば不自然な設定である。

ところで、①⑧と主人公を離れようしたり、接近したり、様々に思い悩む寢覚上の姿が追求されているのであるが、心の奥底には終始一貫して主人公への愛があつたであろう。それが悲恋に終つた原因は、まず①では寢覚上が老関白邸に引取られたことによつて、主人公との間を隔てられて逢えないという外部事情に基くものだつたのが、③以降になると①での障害は取除かれたが、代りに老関白・姉への遠慮、更に女一宮の存在が障害となつてくる。これは⑥で主人公と結婚後も身の憂さを嘆いている所に如実に現われている。即ち、女一宮という正妻が主人公に居るからである。寢覚上は④などの危難にあつても終始主人公への純愛は心強く守り通したのであるが——老関白に対する愛は、父に対する愛のようなもので、主人公への愛とは性格を異にし、同列には論じられない。——寢覚上は自分だけでなく、相手たる主人公にもこのような純粹絶対の愛を要求したところに悲恋の原因があつたと思われる。もし仮に女一宮という正妻が存

在せず寢覚上が正妻であつたとしても、主人公に、少しでも心に分ける他の女性が居る場合には、やはり寢覚上は飽かぬ思いで過ぎねばならなかつたに違いない。一夫多婦制の社会における女性の魂の叫びが、寢覚の悲恋にこめられてゐるようである。

猶、⑦で悲恋の原因となつていたものが取除かれ、ハッピーエンドで終つても良かったのであるが、「いたくものを思ひ、心をみだし給べき宿世」という基本線から逸れる事は出来ず、作者は再び寢覚上を苦難に陥れる事は陥れたが、しかし、寢覚上をそのまゝにして物語を終らせる事が出来ずに、出家という救いの手——出家によつて、寢覚上は最早他から純愛を穢されはしないかという恐れはなくなつたし、主人公との恋愛には終止符をうつたものの、主人公を「おほかたの頼みおほかる頼もし人」として、子供達に囲まれて平穩に世を送つたものと思われる——をさしのべている所に、作者の性格ともいうべきものが現われているのではないか。

又、父入道太政大臣や、老関白などの父親的存在の人物が、終始寛大で暖かな人物として描かれてゐる事も蛇足ながら付加えておきたい。

「寢覚物語絵巻」の詞書をも参照した。(昭40)

(絵巻)

現存本：…阪倉篤義校注、日本古典文学大系「夜の寢覚」(岩波書店 昭39) (現存本)

異本中村本：…金子武雄「夜寢覚物語」(異本) 上下 (古典文庫 昭29-30) (中村本)

主要参考文献は次の通りで、以後四氏の説で特に注記しない場合は、この論文によつたものとする。

松尾聡：…「よはのねぎめの物語」(「平安時代物語の研究」(武蔵野書院 昭38改訂増補) 所収)

長谷川和子：…「夜の寢覚物語大略」(前掲松尾氏著書所収)

小松登美：…「中間ならびに末尾欠巻について」(「寢覚物語全釈」(学燈社 昭35) 所収)

阪倉篤義：…「欠巻部分の内容」(日本古典文学大系「夜の寢覚」(岩波書店 昭39) 所収)

〈中間欠巻部〉

この辺、中村本はまだ原作に忠実であると考えられるので、ストーリーの展開は原則として、中村本の順序通

私は以上述べた如くに「夜の寢覚」を理解しているのであるが、欠巻部分におけるストーリーの展開については、現存部分に見られる女主人公寢覚上の心の動きから類推して、どのように展開していくのが最も自然であるかということに基づいてその内容を推定してみた。その結果、従来の諸説とやゝ異なる所も出来たので、中間及び末尾欠巻部分の内容の概略を次に記しておくことにする。

内容推定の根拠となつた諸資料は、次のテキストを使用した。()内は略号。

無名草子：…富倉徳次郎「無名草子評解」(有精堂

昭29) (無名)

拾遺百番歌合：…竹本元兎・久曾神丹「定家自筆本物語二百番歌合と研究」(未刊国文資料刊行会 昭30

() (拾百)

風葉和歌集：…中野莊次「校本風葉和歌集」(贅精社昭8) (風葉)

寢覚物語絵巻：…鈴木弘道「寢覚物語の基礎的研究」

所収のもの。(塙書房 昭40)

猶、角川書店編集 日本絵巻物全集第十七巻所収

りにする。()内は推定資料。

物語第6年

- ①正月、主人公は広沢の入道を年賀のため訪れ、中君とも御簾ごしに対面する(中村本上)131、132頁)
- ②春の曙、姉大君と仲睦じかつた昔を思い出して歌を詠む(現存本26頁・拾百3番・風葉87番・中村本上)132頁)
- ③同じく春、中君は主人公の叔父にあたる左大将から求婚される(無名166頁など・中村本上)133頁・現存本209、295、344、363頁など)
- ④秋八月の夕、宮中将は中君の琵琶をほの聞き、中君に思いを寄せる(拾百7番・中村本上)135、141頁)
- ⑤宮中将から話を聞いた帝は、中君の入内を熱望される。少くとも一度位中君自身帝に返書をしたゝめた(現存本199、208、221、253頁・中村本上)142、147頁)
- ⑥中君は左大将に嫁す事に決定(現存本191、208、274頁・中村本上)154頁・無名73頁)
- ⑦九月末、噂を聞いた主人公広沢に潜入。そこへ左大将からの文が来る(無名173、178頁・中村本上)163、187頁)
- 三日目の夜、主人公夢を見る(中村本上)82頁)
- 主人公は中君と月を眺め、歌を詠む(拾百10番・現存本

- 363頁・中村本上)86頁)
- 五日目の暁、主人公広沢を離れる(中村本上)187、188頁)
- ⑧主人公しきりに文を送る(中村本上)189、198頁)
- ⑨嫁ぐ日を前に、中君、我身の不幸を深く嘆く(風葉1400番)

物語第7年

- ⑩主人公、石山での形見の小袖を返してくる(中村本上)214頁)
 - ⑪十一月、中君、左大将邸に迎えられる(中村本上)216頁)
 - ⑫寝覚上(以後この呼称)、夫を毛嫌いする(現存本344頁・中村本上)219頁)
 - ⑬左大将、寝覚上の懐妊を見破る(中村本上)222、224頁)
- 物語第7年
- ⑭寝覚上、相変わらず夫に打解けず、主人公に心を寄せ(無名173頁・現存本322、378、295、260頁)
 - ⑮寝覚上の態度に困り果てた左大将、広沢に赴き、父入道にその旨訴える。父入道の叱責の言葉を兄宰相中将から伝え聞いた寝覚上、身の憂さを嘆き、涙に沈む(無名166頁・現存本344頁・中村本上)239、246頁)
 - ⑯ある夜、主人公を慕う寝覚上の魂はさまよい出て主人公の夢に現われた(風葉1035番)

- ⑰七月、寝覚上男児出生。左大将、冥子として公表し、寝覚上をかばう。左大将の寛い愛情に感じた寝覚上は徐々に打解け、念願の姉との仲直りも実現する(無名173頁・現存本309、341、387頁・中村本上)251(下)7頁)
- ⑱主人公から心変りを恨まれた寝覚上、忍び敢えずに返歌する(風葉1014番・無名176頁・中村本下)78頁)

物語第8年

- ⑲八月二十日、主人公の父関白、石山で生れた大姫君の袴着の式を盛大にとり行う。寝覚上、装束・扇・櫛などをそつと贈る(中村本下)9、12頁)
- 中村本では、(下)2頁に八月廿日余り寝覚上が髪を洗わせる記事があり、それから(下)10頁に同じく八月廿日袴着の記載がある。この記述の仕方を見ると、この二つの事件が物語の上で並行しているとは考え難い。むしろ連続した事件のような書きぶりである。時間の経過としては、七月一日まさか誕生以来左大将に打解け始めた寝覚上は、八月廿日頃には髪を洗おうという程気分がさわやかであった。姉大君とも仲直りし、主人公とは疎遠のまま一年程経過したが、主人公はその辛さに耐え切れず、或日心のこもつた歌を贈り、寝覚上もそれに返歌したこともあつた。その頃丁度病勝ちとな

つていた主人公の父関白は、存命中にと考え大姫君の袴着の式を行つた。こう考えるのが自然なのではなからうか。又、左大将の三人の姫君達の年令の点からも、物語第八年の事とした方が都合が良い。

- ⑳左大将、寝覚上に三人の姫君(十二・十・七才)をひきあわせる(中村本下)20頁)
- ㉑主人公の父関白他界し、北の方尼となる。左大将は関白に(以後老関白とよぶ)、主人公左大将に昇進。主人公の第三位中将は権中納言となり叔父老関白の養子となつて、中宮の侍女新少将に思いを寄せる(中村本下)22、27頁)

物語第9年か10年

- ㉒寝覚上の侍女少将は尾張守と、対の君は藤中納言(後に大式)と結婚し、それぐ任地へ下る事になつた(中村本下)29、34頁)
- ㉓老関白、娘の入内を断念し、寝覚上を慰める事に専念する(中村本下)35、36頁)

物語第11年

- ㉔主人公、故中務宮の姫君などに近づくが、その都度失望し、益々寝覚上への思いを新にする(中村本下)37、45頁)

⑤秋の頃、寂しさに堪えかねた主人公、朱雀院の女一宮に言い寄り、降嫁の許しを得る。折から懷妊中の主人公北の方大君、深く嘆く（無名168頁・拾百12番・現存本2934頁・中村本(下)45〜56頁）

物語第12年

⑥大君、心痛の余り女兒を残して他界（夏五―六月）

その子は遺言により五十日の祝の頃から妹の寢覚上に引取られる。主人公、大君の死を嘆く（風葉633番・現存本263265293341頁）

⑦大君の服喪中、寢覚上は大姫君に絵などを贈り、恋しさをしる（中村本(下)64頁）

物語第13年

⑧三月、まさこ七才で殿上童し帝の御氣に入る。中宮や左大將にも対面（中村本(下)72〜75頁）

⑨春の司召に寢覚上一族昇進する（現存本200207385329頁・中村本(下)81〜84頁）

⑩老閔白は、長女を主人公に、中君を春宮にと志していたが、主人公は長女を帝にさし上げるよう勧める（中村本(下)85頁）

⑪突然老閔白は病に倒れ、後事を寢覚上及び主人公に託して世を去る（現存本195頁・中村本(下)103〜106頁）

いた長女の入内準備に専念する（現存本18920118238頁・中村本(下)153頁）

△末尾欠巻部▽

物語第16年

①朱雀院の喪があけて、尚侍は皇子を連れ内裏へ帰られる。帝の御寵愛いよいよ厚く、中宮も内心總やかでない（中村本(下)215頁）

②大姫君（十二才）の装着。中宮が腰結の役に当たられた。この時初めて寢覚上と対面された中宮は、心も空の帝の御様子を語る（拾百2番・中村本(下)216〜221頁）

物語第17年

③大姫君は東宮妃となり、寢覚上も付添つて参内する（中村本(下)226227頁）

物語第18年

④まさこ元服（十二才）、尚侍の若宮の袴着（三才）、小姫君の装着（中村本(下)227228頁）

物語第21〜22年

⑤世継を得た帝は位を東宮に譲られ、大姫君は中宮に、尚侍の若宮は東宮に立たれ、盛大に儀式が行われた。寢

物語第14年

⑫主人公、故老閔白邸の南の新邸に移転し、大姫君、母尼君、女一宮を住まわせ、まさこをも引取る（中村本(下)110山頁）

⑬かねて寢覚上に思いを寄せていた式部卿宮の宰相中將、誤つて故老閔白中君を盗み出す（夏か初秋）。中君にとつて不本意な結婚だった（風葉1308番・現存本268269276頁・中村本(下)118〜146頁）

⑭帝、寢覚上を尚侍として召されるが辞退し、代りに故老閔白長女を差し出す。残る三女も主人公の弟大納言に嫁し、寢覚上は母としての務めを立派に果す（現存本194195221394253頁・中村本(下)129〜141頁）

⑮秋九月頃、広沢で別れて以来久方ぶりに主人公は寢覚上と対面するが、ついに打解けずに別れてしまう（拾百10番・中村本(下)133〜137頁）

⑯冬の夜、主人公は寢覚上を訪いつれなさを恨むが聞き入れられず、以後二人の間には冷たい空気が流れる（現存本189277頁・中村本(下)150頁）

⑰女一宮の母大皇宮は、主人公と寢覚上の間を裂こうとして、寢覚上を朱雀院にと溝えた。冬頃から大皇宮は故老閔白邸に滞在。寢覚上は主人公との交渉を避け、近づ

覚上もこの時ばかりは晴々と身の幸福を味わう（寢覚上の幸福を完全な物にするためにも、女一宮はこの頃既に物語の本筋から離れていたであろう）（無名179頁・中村本(下)229頁）

⑱寢覚上は准后に列せられ、主人公も閔白へと進んだらしい（風葉詞書）

⑲寢覚上は父入道太政大臣の七十賀を心をこめて祝い、中宮も行啓された。父入道は感激にむせび、娘や孫達の繁栄を喜ぶ（風葉1408番）

⑳まさこは後に東宮女御となつた女性と仮初の恋を語るう程に成長（風葉915番）

㉑寢覚上には、これ迄の波瀾に富んだ生涯とはうつつて変わった、平和で幸福な日々が続いていた（推定）

この後、末尾欠巻部内には、所謂「寢覚上偽死事件」と「まさこ勘当事件」とがあるのであるが、従米の諸説は、

(A)勘当事件を偽死事件より先とする。…校注（藤田徳太郎・増淵恒吉）・松尾・長谷川

(B)勘当事件を偽死事件より後とする。…小松。阪倉とに二大別出来る。(A)説によると、まさこが勘当されてから許されるまで、少くとも一年半が経過した事に

なるが、しかし絵巻詞書Ⅳの院の言葉によれば、その時期は「月ごろ」に過ぎないのである。これに対し、(B)説をとれば、勘当事件は七、八ヶ月で解決し、(A)説のような時間的矛盾は起らない。従つて私は(B)説に従つてストーリーを展開させて行きたいと考える。

物語第22年

⑩七月頃、寢覚上は白河院に閉じこめられて家族との音信も断たれていた(風葉229番・拾百9番)

何故寢覚上は白河院に身を潜めていたのであろう。白河院を故関白の遺邸とする説(松尾・橋本^{注1})もあるが、それは拾百15番の詞書「しらかはの院よりおなからにのがれいでたまへる」などからしても不適當である。女三宮が住んで居られたり、——松尾氏は、白河院が現在故関白二女右衛門督上の所有になつており、女三宮には叔母にあたる所から互に親しくし、丁度遊びに来ていたのではないかとされるが、右衛門督上が女三宮と親しくしていたような事実は、少くとも現存諸資料からは窺えない。——女三宮が冷泉院に移られたから、その侍女中納言君が残つているなどの点から考えると、白河院はやはり女三宮、ひいては冷泉院所有の邸だつたと考えた方が良さそうである。当時冷

心は随所で述べられているが、特に、

「今年のうちに此位をも捨て、八重つつ山のなかをわけても、かならず思ふ本意かなひてなん、やむべき。いみじく思ふさまにさだまりはて給ゆとも、それを、さて聞くべきにもあらず」(現存本卷三224頁)

「いかで位をとる去りて、すこしかるかなる程になりて、いみじき大臣のもてなし、かぎりなしといふども、いま一たびの逢瀬を、いかでかならず」(

卷五181頁)

という言葉が意味を持つて来るように思われる。退位して比較的自由になられた院は、好機を窺つている中に、僅かの隙を見つけ、関白が御嶽もうでとか物忌とか等の事情で妻と同居できない時とか、あるいは女君が物もうで、方違え中とかの場合(小松説)——寢覚上を白河院に連れ込み軟禁したものと思われる。この場合必ずしも大皇宮の奸計が働いたと考えなくても良い。先述の如く、女一宮は死亡乃至出家によつて既に主人公との関係が絶えていたと思われるので、それと時を同じくして大皇宮の果す役割も消滅したものと考える。従つて寢覚上を白河院におびき寄せたのは、院の一存によるものであろう。寢覚上の邸では、かつて

泉院は女三宮とここに居られた。寢覚上は冷泉院の策謀によつて白河院に連れ込まれ軟禁されているのである。従つて、白河院を偽死後の隠れ場所とされる説(松尾・長谷川・橋本^{注2}・鈴木弘道)には賛成できない。

あれ程院を警戒していた寢覚上が何故院の許に赴いたのか。長谷川氏の如く、院からまさこの事に関してという名目でお召しかつた、と考えるのが最も自然であるが、しかしそうすると寢覚上が白河院で嘆きの歌をうたつているのが、風葉229番によると「秋の初風」で秋の初めになるのに対して、まさこ勘当後間もないと思われる風葉309番・拾百134番の歌からは晩秋の気配が感じられる所が不審である。——但し、長谷川氏自身の説中では何等矛盾を生じない。——まさこ勘当事件は数ヶ月で解決しているから、これらの歌を風葉229番より一年前の晩秋と考える事も不可能である。また、あれ程心強く院を拒否した寢覚上が、たとえ子へ參上するというのも不自然で、少くとも二、三ヶ月は間を置きたい。従つて、寢覚上が白河院に隠れ住むようになった原因は、まさこ勘当とは無関係である。その原因は恐らく院の策謀だつたと思われる。院の執

の故関白二女盜難事件の時のように驚き騒ぎながらも関係者以外には口外せず、密かに行方を探らせていたのであろう。

⑪寢覚上は既に主人公の子を宿しており、接近された院もそれに気付きためられた(絵巻Ⅳ4・■4・拾百20番詞書)

⑫折から白河院に滞在中の女三宮の所へ、まさこは度々忍んで訪れていたが、まさか母がそこに閉じ込められていようとは知る由もなかつた(拾百13番詞書)

広い邸内であるから、互に気付かずに行事か進行していったとしても不思議ではない。まさこ女三宮は、幼な馴染の恋人同士で、女房達からも好意的に迎えられていたらしく、騒ぎを起こすような者も居なかつた。

院が二人の仲を気付かなかつたのは、二人が契りを結んでからまだ日が浅く、かつ、院自身も寢覚上の事で手一杯だつたからであらう。

⑬乱暴はされなかつたが益々情熱を燃やしてこられる院の御様子に恐れをなし、窮地に陥つた寢覚上は、——恐らく、出産後には最早院を避ける事が出来ないと判断したのであろう——何としても白河院を逃れようと決心した(推定)

④丁度その頃、女三宮とまさこ、恋愛に気付かれた冷泉院は、寢覚上のみならず、幼少より特別目にかけてかわいがつてきた女三宮までか自分の意のままにならないのを知り、激怒されるのであつたが、その折も折、寢覚上は急死してしまつた。(八月頃) 寢覚上の遺体は加持祈禱にあつて山座主(巻一の法性等の道都)に引き取られ、院は悲しみに沈まれた。しかし実は、寢覚上はその後秘法によつて蘇生させられ、誰にも知られないように身を隠していたのだつた(拾百15番・無名185頁) これが所謂偽死事件である。

○原因・動機について

この点につき鈴木氏は、^{注4}寢覚上懐妊の事実を指摘されたが、寢覚上にとつて懐妊の事実を院に憚る必要はないし、又尋常の手段で院の手から逃れ得ようとは思えない。やはり、日毎に強くなる院の執拗な愛情から逃れ、我が身を護りたいと考えたのが、偽死の動機だつたと思われる。

○実態

従来の諸説は大体三つに分けられる。

(A)或所に隠れて、死を装う……松尾・長谷川・校注・鈴木^{注5}

(B)何物かの力によつて急死し、また蘇生する事。山の座主の助力を考へる。……小松・阪倉^{注6}

(C)出産に際しての仮死……石川徹

(C)は、絵巻詞書から安産だつたと考へられるので不適當。(A)の如く、こつそり姿を隠し、為に死んだと噂される事は『源氏物語』の浮舟・『狭衣物語』の飛鳥井姫等にも見られるが、それらはいずれも人目も繁くなく、嚴重な警戒もなされていなかったのであつて、『夜の寢覚』の場合とはやゝ事情を異にする。この場合、院の手を逃れるのに並一通りの方法では不可能と思われ、更に『無名草子』夜半のねざめ評言で、「しにかへるべきはうのあらむは、前の世の事なればいかかはせむ」「こともなのめになべてしくうち思ひて」「なべての世にためしあらんことのやうに」といつている事からして、たゞ単に「死んだ振をして身を隠していた」とは考へ難い。「死にかへる」とは、一度死んだと見えたものが再び蘇ることだと思われる。そして蘇生後も死んだと思わせて隠れていた事をも含めて、結果的にみた場合「そら死」「死んだふりをしていた」という名称が与えられたのではないだろうか。又『無名草子』とりかへばやの条に、女中納言の蘇生の

様を「夥しく恐ろしけれ」と非難しているが、夜半のねざめの場合は不承知ながらも一応認めている所からすると、「とりかへばや」の蘇生の様相とも違つていたやうである。寢覚上は一体どのやうにして死んだのか。「あながちにのがれいで」というには、病氣などで自然に死んだとも考へられない。窮地を逃れる最後の手段として死を考へたが独力では出来ず、相談を受けた山の座主が「それ程にいうのなら」と、一か八かの氣持で秘法を試みたのかもしれない。死んだふりをしただけではきつと院に見破られてしまつたであろうから、その状態は院を納得させる物でなければならなかつた。阪倉氏も小松氏も「何物かの力によつて」

「何等かの秘法によつて」と言及されているだけであつて、その実態ははつきりつかめないものであるが、現段階では両氏の説に従つておき後考をまらしたい。山の座主というのは、恐らく巻一で「山に、このごろならびなき智者験者」と評された法性寺の僧都で對の君の兄にあたる人だろう。對の君の年令から類推すると、現在僧都は六十〜六十五才で存命中で、座主になつていたと考へても不都合ではなからう。

○偽死後の隠れ場所

あくまで想像にすぎないが、寢覚上の遺骸は恐らくその場に付添つていた山の座主が引取り、自分の勢力下にあるどこか多分都の外で蘇生させ、そのまま誰にも知らせずかくまつていたものと考へられる。

⑤寢覚上の急死に遭遇された院は、不吉な場所を離れる為と、まさここと女三宮の間を引離すため、女三宮を伴つて急ぎ冷泉院へ戻られた(拾百13番)

院は何故二人の恋を許さなかつたのか。石川氏の御指摘通り、この恋愛事件が『源氏物語』の夕霧と雲井雁との關係にヒントを得ていゝるであろう事は疑いなく、たゞこの場合、まさここと女三宮はいとこ同士でもなく、又まさこは三位中将であるから(拾百8番詞書)位もそれ程低くない。更に女三宮には入内したくても入内すべき相手が居ないのであるから、院の立腹理由は『源氏物語』の内大臣のそれ(東宮妃にしようという野心が砕かれたため)とは別物であろう。又鈴木氏は、『源氏物語』の女三宮物語を想起し、誰か権力者に降嫁が内定していた、とされたが、院が退位されたのは寢覚上に今一度逢いたがため、出家などと思ひもかけられなかつたであろうから、ここに朱雀院の心境を持出すのは如何であろう。更にまさこ勘当事件

と女三宮物語とは皇女である点が一致しているだけで骨組みはまるで異つてゐる。即ち源氏と女三宮とは正式の夫婦であり、柏木の行動は所謂不軌密通で、源氏の怒りを買うのは当然である。結局、まさこと女三宮事件に、源氏と女三宮事件を想起するのは不適當という事になる。

次に皇女の結婚について少し考えてみよう。「源氏物語」で、女三宮の婿として柏木右衛門督は「むげにかるびたるほどなり」として退けられてゐる。又「榮花物語」で、三位中将道雅（巻十二）、中納言俊房（巻三十七）等が内親王に密通したというので勘気を蒙つており、これらの例をみると位の低いのが立腹の一因となつてゐるようにもみえるが、しかし教道のように三位中将で内親王を賜つてゐる例（巻三十）もある。今井源氏によれば、桓武朝から花山朝に至る間の史実では、必ずしも皇女の降嫁先が高位高官ではなかつたという。すると、「榮花物語」における立腹は親の許さぬ密通をした事が原因なのであろうか。「源氏物語」で朱雀院が「親に知られず、さるべき人も許さぬに、心づからの忍びわざ、し出でたるなむ、「女の身には、ますことなき疵」とおぼゆるわざなる」（若菜

注10)と述べておられる事も参考にならう。まさこと女三宮の場合もこの類のもではなからうか。石川氏の如く、齋宮が齋院に立たれる事が決定していたからだと考へてもよいのであるが、確定的な根拠もないので、一応「親の許さぬしのびわざ」をした事が、寝覚上の激しい拒絶にあい焦立たれた院の御心を一層刺激し、終に勘当という事態を引起こしてしまつたものと考え

ておく。

⑥ 晩秋、院の勘当を知らずに白河院を訪れたまさことは、女三宮の侍女中納言君から事情を知らされ悲嘆にくれる（風葉1309番・拾百134番。無名170頁）

⑦ 冷泉院に戻られた院は直ちに主人公をよんでこれ迄のいささつを話し、やつと寝覚上の行方をつきとめる事が出来たと喜ぶ主人公の耳に、寝覚上の死を泣く／＼打明けられるのだつた（推定）

⑧ 悲しみに沈む主人公は、寝覚上の死を公表し葬儀を出し（恐らく寝覚上の遺骸はなかつた）、一族は喪に服した（風葉621番）

にしも眺の夢」（圈点、その眺「窓のともし火」と、拾百15番「見しまゝのゆめ」とが同じ時の事を指しているように思われるので、中宮が母の生存を聞きつけたより前、即ち偽死事件後の服喪中の歌と解した。

⑨ まさは、院の勘当と母の死という二重の不幸に見舞われ、悲しみの余り北山に籠つてしまふ（風葉1270番。拾百8番・風葉613番。拾百17番）

⑩ 寝覚上の突然の死後、世を味気ない物に思いとられた冷泉院は、女三宮を伴つて大内山へ籠られそこで出家される。院の中宮もそれに倣つて剃髮（絵巻目2・風葉1293番・拾百20番・拾百2番）

大内山は嵯峨御室の北嶺である。中野幸一氏は、史実と照合して大内山を「淋しい山里の代名詞」注11)「通世の地」としておられる。又「大和物語」三十五段に、

たかき所なれば雲は下よりいとおほくたちのぼるやうにみえければ、かくなむ

しらくもの九重にたつみねなれば大内山といふにぞありける

とてまかくても罪去り申すべきかた⁴なければ、大臣に知られてものせられ果てず、なほうつしさまにて世にあらむこと、われながらうとましくおぼゆる、昔よりの本意あるをとてなむ……

かど」から、後に帝が比叡山に移られたと考える必要はない。「源氏物語」で、朱雀院が出家されて「西山なる御寺」に移るわれた事を、「山籠り」「山住み」「山の御門」といつてゐる事が一つの傍証となるし、又絵巻目2で「法師といへど、さばかりの人の分けまありたれば」という法師は山の座主であり、その座主が「分けまゐ」つたのは、比叡山以外の山と考へた方がよさそうである。

⑪ 一方、蘇生して身を隠していた寝覚上は、風の便りにまさこの北山籠りを聞いて、月の明るい夜、歌を詠む（風葉270番・拾百8番）

物語第23年

⑫ 一月頃、寝覚上女児を安産する。そして間もなく出家を敢行する（拾百20番・絵巻目34）

寝覚上の出家は出産後であり、かつ主人公に知られる前と考へられるので、一応ここに置いた。絵巻目34の

圈点部分を「知られて」とよむ説と、「知られて」とよむ説があり、前者は大臣に内密にして出家する、後者は大臣の許可を得て出家するという様に、全体の意味が逆になるようにみえる。しかし清濁いずれによもうと、全体の意味する所は同じになると考えられる。即ち、「知られて」と濁音によむ場合、「大臣に知られてもせられ果てず」を挿入句的に考え、「大臣に知られないで過すなんて事は出来ずに、結局見つけ出されるのだとしたら」と解する事が出来るのではないか。いずれにしろ主人公は、巻五で寢覚上出家を阻止しているし、かつこれ迄自身が出家しようなどと思いつた様子も窺えないし、寢覚上真死後も右衛門督上を対の君として迎えるなど、およそ出家とは縁遠い人のようにみえるので、もし主人公が寢覚上の出家希望を知っていたなら、恐らくそれを阻止し、再び俗世に漂わせる事になったと思われる。寢覚上は今度こそ自分の意志で出家を敢行したのである。

②北山に籠つたまさは、翌春三月頃桜につけて姉と母を偲ぶ歌を贈答(風葉13番・拾百17番)

④初夏四月頃、女三宮の侍女中納言君が里に退つた事を聞いたまさは忍んで訪れ、女三宮への愛、絶望的な気

しにかへるべきはうのあらむは、前の世の事なればいかげはせむ、その後、殿に聞きつけられたるを、いと浅ましなども思ひたらで……中略……いみじくまがまがしき事なり。その後まさはこの事に思ひ余りて、院に御文奉りたる程こそ……(185頁)

となつて居り、主人公に聞きつけられてから、院へ文を奉つたと考えた方が素直な解釈のようであるが、「無名草子」作者は必ずしもストーリーの展開に従つて批評を加えていつているのではないので、二番目の「その後」は偽死事件の真相が明らかになつてしまつた後と考へて、「その後」は殿にききつけられた後とは考へない事にする。院に文を奉つてから、主人公と対面したと考へたい。何故なら、寢覚上の生存がまだ家族にも誰にも知られていない時、そのままじつと隠れていれば生存の事実はうまく隠し通せるのに、まさかの事に思い余つて、ついに一大決心をして院に文を奉るとした方が、一層寢覚上の心情が「あはれ」に感じられるのではないか。既に家族には知れていたという場合には、「どうせ分かつてしまつたのだから、もう一人位院に知られたつて……」という様になるのではないかと思われるからである。

持を訴え、互に歌を贈答する(風葉1185番・絵巻I-2・112)

北山から、わざわざ草深い里を訪れたまはこの様子を見申し上げた中納言君が、「いささかも女三宮に対する(まさはこの)愛情が薄いとお見えにならなかつた」と感じたというのが絵巻I-1である。

②まさは、中納言君を訪問した帰り途、冷泉院の左大臣の女御を訪れ、歌を贈答する(拾百6番・絵巻I-13)

詞書中の「過ぎにし春の夢の□ひ」は、春の夢の機にはかなかつた女三宮との恋愛及びそれに続く勘当の辛さ苦しさを指すのであろう。

⑥まさはこの勘当がいつまでも解けないのに思い余つた寢覚上は、意を決し、山の座主を介して院にまさはこ御許しの文を奉る(無名185頁・拾百20番・絵巻II-345)

⑦寢覚上生存を聞きつけた主人公は、急ぎ駆けつけ寢覚上と対面。そして猶世間には公表しないまま、広沢に移り、子供達を迎えるなどして静かに生活していた(無名185頁・拾百15番・風葉詞書)

主人公が寢覚上生存の事実を知つたのは、⑥より後と考へたが、「無名草子」では、

④四、五月頃ついにまさはこは許された。この頃中納言に昇進(絵巻IV)

⑤数日後、まさはこは院の許に参上する。まさはこの口からはつきり寢覚上出家と、女兒安産を聞かれた院は、心の動揺を抑えられなかつた(拾百20番・無名186頁・絵巻IV-1234)

⑥晴れて院の御許しを得たまはこと女三宮は、或秋の夕、昔を思い、改めて現在の幸福を享受する(無名170頁・風葉1215番)

③まさはこ、右大將に昇進(風葉詞書)

②広沢で行い澄ました日々を送つていた寢覚上は、程なくはかなくなつた。中でも右衛門督の嘆きは深く、終に出家する(無名168頁)

③残された右衛門督上はやがて主人公に對の君として迎へられ、子供達の後見をする事になつたが、時々不相応な嫉妬をして主人公から飽き足りなく思われる事もあつた(無名182頁)

④春宮が元服され、春宮の宣旨殿女御が入内した(風葉915番)

これ以後の資料はなく、恐らくこの辺で物語が終つた

ものと考えられる。

注1 『校本夜半の寢覚』所収の解説(大岡山書店 昭

8)

注2 注1に同じ

注3 「寢覚に於ける偽死事件——その発端と経過について——」(国文学・関西大 昭40・1)

注4 注3に同じ

注5 注3に同じ

注6 「源氏物語の影響を受けた平安後期の文学」(国語と国文学 昭31・10)

注7 注6に同じ

注8 「寢覚物語絵巻詞書注釈」(『寢覚物語の基礎的研究』(塙書房 昭40)所収)

注9 「女三宮の降嫁」(文学 昭30・6)

注10 日本古典文学大系本による

注11 「『すもり物語』覚書」(文学語学 昭34・6)

注12 日本古典文学大系本による

おわりに、この論文を作成するにあたり、終始暖い御指導と御助言を賜りました、松村博司先生に厚く御礼申し上げます。

(愛知県立時習館高校教諭)

典拠から見た増鏡の性格

田尻 幹子

増鏡には多くの典拠が用いられている。松村博司先生は、『歴史物語』(塙選書 昭36・11)において、

増鏡の材料については、和田英松・佐藤球共著『増鏡詳解』に最も詳しく見られるが、その後見出されたものをも加えると、弁内侍日記・中務内侍日記・どはずがたり・葉黄記・岡屋関白記・深心院関白記・実躬公記・伏見院御記・花園院宸記等の日記、宇治御幸記・文永五年彌鶴記・舞御記・北山准后九十賀記・波岳要記等の記録、五代帝王物語・帝王編年記・保暦間記等の歴史拾遺愚草・土御門院御百首・遠鳥御歌合・続古今集等の歌集歌書、公卿補任以下の補任類等が明かに材料に供されているといわれ、さらに源氏物語・伊勢物語等の作り物語、世継(栄花物語)・大鏡・今鏡・水鏡・平家物語等の歴史文学、和漢朗詠集・本朝文粹。史記・漢書・南史・白氏文集等の内外の漢詩文、法華経・親無量寿経・仏所行讃等々の仏典等も加うべく、これ

らのうちにも含まれる単に文飾として使用されているだけのものをも数え挙げてゆけば、実際に典拠として使用されているものはどれ程になるか測り知れないものがある。

と述べておられる。これらの膨大な資料が実に見事に統一され、全体として王朝風の優雅な物語を構成していることは、すでに石井順子氏(『増鏡の性格』)、「お茶の水女子大学国文」第七号 昭32・7)等により指摘されている所であるが、それらの個々の典拠についての精細な調査を行なうことは、増鏡の性格を知るために大切なことではないかと思われる。以下、増鏡研究における一つの基礎的な作業として、増鏡の作者が、それらの資料をどのように扱い、どのように全体の構想の中で処理していったかということ、個々の例について調査した結果を報告し、次に増鏡全体の中における典拠の位置づけを調べ、そこからうかがわれる増鏡の性格を考えてみ